



後藤由紀(ごとうゆき)
年齢/25歳
身長/160cm
体重/43kg
BWH/85・60・89

地元の田舎町で、普通の仕事に就いている、OL。独身で、彼氏は居ない。高校を出た後、短大を経て、今の仕事に就き、数年を過ごしている。生まれてから今まで、ずっと実家暮らし。幼少の頃から、大人しく、地味な印象の少女。勉強はそれなりにだが、運動は苦手で、ずっと帰宅部。趣味は読書で、漫画なども読む。多少、男性アイドルや、漫画のキャラクターに憧れたりする、地味系少女。友達も少なく、学生時代は、華やかとは言い難い青春を送って来た。彼氏などが居た事も無く、25歳の今まで、処女だった。交際を申し込んで来た男も居たが、怖くて断っていた。典型的な、行き遅れ女。

最近、やはりこのままではいけないと思い、彼氏を作る事にする。言い寄って来ると男は、たまに居る。その中から、将来性のありそうな男を見繕った。将来性とか、周りへの面子とか、そういった基準で男を選ぶ辺り、経験の少ない女である事が明白だった。今どき珍しい、黒髪ロングに、眼鏡女子。そんな雰囲気、女慣れた男には、新鮮に映った。そんなこんなで、彼氏が出来た由紀。相手は、同じ会社の男。それなりに容姿も良く、性格も明るく、面白い。経験の少ない女がハマりそうな、典型だった。手も早く、大人しい由紀は、あっという間に、男に抱かれてしまった。最初は痛がったが、それも男にとっては、慣れたものだった。初体験の女など、何人も喰って来たからだ。男の、欲情に支配された激しいセックスに、大人の女である由紀は、すぐに夢中になった。二人は、暇さえあれば逢瀬を重ね、セックスを繰り返した。やがて、由紀は淫らな本性を露わにし、男の前で恥じらいながらも、官能的な姿を見せながら、甘い喘ぎ声を上げて、腰を振り、淫らなセックスを貪る様になった。それは、普通の若い女の、恋をする姿だった。

「遅くなって……すみません」

約束の場所に、3分ほど遅れて、姿を現す由紀。どういった格好で行けばいいか迷い、僅かに時間をオーバーしてしまった。

「いいよ、後藤さんは、就業時間に遅れた事なんて一度も無いもんな」

ギリギリまで、おめかしに時間を掛けたのだと思うと、何だか可愛らしいと思う男。

「じゃあ行こうか」

「はい……」

正直、まだ戸惑って、緊張している由紀。男とデートなど、生まれてから今まで、一度も経験は無い。自分みたいな、地味な女でいいのだろうか。そんな考えが、頭を過る。

その日のデートは、つつがなく終わった。流れも、定番のもの。まるで、少女漫画で見たような、楽しいデートだった。

「じゃあまた、明日仕事で」

「はい……」

終始、紳士な男の振る舞いに、心を打たれる由紀。他の男の事は分からないが、こんなに男の人とは優しいものなのか。多くの女性が、恋愛に夢中になるのも分かる。由紀も、男に良い印象を抱き始めていた。

『この人なら……』

奥手な由紀も、そう思うようになっていた。由紀も、経験が足りない女とは言え、普通の女。男に心惹かれる、女の本能には逆らえない。

「はあ……はあ……はあ……さ……佐藤さん……っ、い……いく……っ」

喪女を自覚する由紀は、もうその日から、デートの時の事を思い出し、オナニーに耽る。すればする程、イケばイク程、男の事が好きになっていった。2回目のデートでもう、由紀は男に抱かれた。由紀自身、そうされたいとおもっていたからだ。そうになると、男と女は、あつと言う間だ。それは、経験など関係ないのだった。



毎週のように、デートを重ねる二人。もう、会えば必ず、セックスをするようになっていた。セックスしかしないデートの日すらあった。二人はもう、相思相愛の恋人同士である。セックスだけで、もう幸せいっぱいだった。

「眼鏡は……外した方がいいんでしょうか」

「由紀の好きにしたらいいよ」

「……はい、では着けたままにします。そうでないと、あなたの顔が見えませんか…」

シャワーを浴び、裸の姿のまま、ベッドルームに現れる由紀。身体を隠したりなどしない。男は、由紀を愛し、欲情してくれる。もう、何度もセックスしているので、由紀は身体を隠す方が失礼だ、と思った。

「綺麗だよ、凄く」

「…有難う御座います」

正直、自分の身体が美しいとは思っていない。同世代の女達に比べると、明らかに劣化が見える。男に関わらないで生きて来た由紀は、恋愛経験が皆無で、女性ホルモンが足りない。結果、実年齢よりも肉体の若さが失われていた。やはり女は、恋をしてなんぼなのである。

「由紀」

「弘樹さん…」

裸のまま抱き合い、キスをする二人。映画のような、大人のラブシーン。二人は、初めてのセックスの時から、お互いを名前で呼び合うようになっていた。

「はっ………ん…」

むにゆり、と乳房を揉まれ、甘い声を出す。オナニーのせいで、乳房は敏感に感じるようになっていた。

『おっぱい……こんな色気の無いおっぱいでも……男の人は興奮してくれるんだ……』

由紀の乳房は、25にしては若干、垂れ気味である。割と大きめのせいで、重力に負けている。恋をしてこなかったため、体型の維持を怠った結果だった。ブラジャーなども、サイズの合わない安物を付けていたのだ。由紀は、それを後悔していた。

「はあ……はあ……、あん……」

尻を揉まれまくりながら、舌を絡め合い、キスを繰り返す。由紀のヒップは、若い女にしては、結構大きい。それは、恋する女としては、かなりのコンプレックスだった。

「ほら、由紀。こんなにボッキしてるよ…」

「はい……」

二人の間に挟まれ、勃起したペニスが、凄まじい固さとなっている。それに、欲情しつつ、嬉しさを感じる由紀。好きな男に欲情される幸せは、恋をしている女にしか分からないものだ。

『こんな…可愛くない身体に…こんなに大きくして…嬉しい、弘樹さん…』

由紀は、男のペニスの固さに、猛烈に欲情していた。

「はっ……！はっ……！はっ……！はああ……！」

男の下で、両足を広げて、ペニスを受け入れる由紀。出入りする太く長い肉棒が、由紀に快楽を与える。由紀は、もう25歳。その身体は、女としては熟しており、セックスには快楽を感じるようになっていた。最初は痛かったが、もう大丈夫である。オナニーなどより、圧倒的に気持ちいい、恋人とのセックス。それは、大人しく、控えめな性格の由紀さえも、淫らな声を出させる程の、快楽の世界だった。

「ほら……由紀！おっぱい揺れてるよ、こんなに……っ！」

「ああんっ……！」

「可愛い……、可愛いよ、由紀……！」

男の激しい責め苦に、由紀の乳房が大きく揺れ動く。張りが失われた、若くも無い乳房が、たぶたぶと形を淫らに変えていく。仰向けで、横に広がる乳房は、かろうじて女としての美しさを保つ。女は、40くらいまでは男の相手が、辛うじて出来る。由紀は、普通の女というレベルでは、ちゃんと女の魅力はある方なのだ。

仰向けに寝そべる、由紀の裸の姿を見て、男は愛しさと欲情を感じる。元々、地味で容姿も美人とは言えない由紀。しかし、その大人しく、優しい性根が、愛しかった。何が醜いかというと、性格の悪い女が、一番醜く、男に嫌われるのである。

「見てるだけで、イキそうだよ由紀！由紀の顔とオツパイ！」

『由紀の……オツパイ……！結構大きい……！』

顔も、乳房も、AV女優などと比べると、美しいとは言い難い由紀。しかし、好きな男に抱かれて、裸を見られる事に興奮し、セックスの快楽に声を出して喘ぐその姿は、紛れも無く、魅力的だった。男は好意を表す事が出来ない女など、恋をする資格は無い。

ぶるっ……、ぶるっ……
由紀の乳房が、男の目の前で、形を変えて揺れ動く。張りも、弾力も無い、垂れ気味のオツパイ。しかし、それでも世の中に多数居る醜い女に比べれば、何とか欲情出来るレベルと言えた。本当に醜い乳房は、こんなものではない。

『ああ………恥ずかしい……っ』

「ああんっ……！」

ぱんっ！と腰を打ち、由紀の身体を責め立てる男。重力で潰れ、横に広がった乳房が、ぶるんっ！と大きく揺れる。熟れた肉体の、由紀の乳房はまるで40代の女の乳房のようだった。ぶよぶよして、揉み心地もイマイチである。乳輪もだらしなく伸び、揺れる度に形が変わる。色が、鮮やかな桜色なのが、救いだった。

好きな男の前で、裸を見せて、足を広げて、膣を濡らす由紀。羞恥が、由紀を快楽の高みへと連れて行く。この恥じらいが、喜びに変わるのが恋愛の醍醐味だった。由紀は、それをセックスをするようになって、初めて知った。オナニーなどとは、比べ物にならない快楽。これを、今まで経験していなかった事を、後悔した。

『好きだからかな、これがイイんだ……！』

「どう、由紀は気持ちいい？」

「はい……」

初めて会った時から、ダサくて地味な女だった。恋愛経験もゼロだろう。きっと、服の下も醜いに違いない。男はそう思った。しかし、相手を好きになれば、そんな事はどうでもいい。むしろ、その欠点が、愛しく思えた。確かに、由紀はパツとしない女である。化粧もしないし、眉毛も太過ぎである。しかし、その柔らかい物腰と、穏やかな性格。そして、弛んだ身体の割に、白く透き通った肌。そして、手入れの行き届いた脇や陰毛。その身体には、背中にも、脛にも、産毛すら残されていない。決して、美意識の欠落した、喪女では無い。男は、由紀の柔らかすぎて垂れた乳房を揉み、形を整えながら、腰を振る。ペニスが、毛むくじらの股間を、ぬるぬると滑り、出入りするのが見え、更に勃起した。

「チンポ気持ちいい？ほら、答えな由紀」

「チンポ気持ちいい……！ああん……！チンポ気持ちいいです……っ！！」

淫らな言葉を言われ、ゾクゾクと興奮に身を震わせる由紀。オナニーの時、散々言った言葉。実際に男の前で言うのは、更に凄まじい興奮だった。

「いく！由紀！いくよ由紀！ああいく！！ああ！！」

愛し合う二人は、淫らなセックスで、あっと言う間にいった。

ホテルの中。二人っきりで過ごしているの、二人とも、全裸だった。まるで、アダムとイブになったようで、興奮するし、幸せだった

「お茶を飲みますか。それともコーヒー？」

いつも会社でするように、お茶を入れる由紀。若いOLである由紀は、お茶汲み当番でもあった。気の利く優しい性格の、思い遣り溢れる由紀。容姿よりも、そういった部分が、男には好ましかった。

「はい…」

控えめな声で、男に言われた通りにする。いつも会社で見ている姿だが、今は一糸纏わぬ全裸だった。若い女や、芸能人に比べると、若干美しくない身体付きだが、それでも十分に女としては魅力的だ。まだ親しくない頃、この裸を想像して、何度オナニーしただろう。

「由紀」

はい、と返事をし、振り向く由紀。その後ろ姿に、猛烈に欲情する男。細いとは言えないウエスト。どっしりとした大きな尻が、異常に扇情的だった。欲情し、由紀の身体を抱く男。

「えっ？あの、弘樹さん…、あ……っ」

急な事に、戸惑う由紀。しかし、男が欲情したのだと察し、すぐに大人しくなる。顎を手で掴まれ、後ろを向かされる由紀。そのままキス。由紀は、すぐに舌を出し、男を受け入れる。二人きりの時のキスは、ディープキスなのが普通だった。

「あ……ん、……っ、ん………、あん………」

れろれろと舌を絡め合わせながら、乳房を揉まれまくる由紀。腰の辺りに、勃起した男のペニスの感触。自分の胸が、好きな男を、ここまで欲情させているという事実が嬉しい。好きな男の欲情は、女ならば誰でも喜ぶものだった。

「由紀を抱くよ。このまま」

「はい………」

男の事が大好きな由紀は、男の望む事なら、何でも叶えてやりたいと思った。男を金ヅルとしか見ていない女には、死んでも理解出来ない世界だった。二人はそのまま、その場所でセックスを始めた。



「さっきの由紀、超エロかったぜ」

言われて、赤面する由紀。ベッドにちょこんと座り、照れた表情を浮かべていた。

「い……言わないでください……。自分でも……その、どうかしていたと思います」

絡み合いながら、洗面所まで移動した二人は、そこで自分達を鏡に映しながら、セックスをした。それは、今まで経験した事の無い、凄まじい興奮で、由紀は今まで以上に、いやらしい声を出して乱れてしまった。言っではいけない言葉を、何度も言った気がする。

「チンポとかマンコとか、すっげー言いまくってたぜ。自分から腰振ってよ。いやー、こんな大人しそうな女が、淫乱化するのハポッキするぜ、ホント」

かあ……と、更に赤くなる。あまりの興奮に、普段以上に、いやらしい言葉を連呼した。それ自体にも興奮したし、それで男が更に興奮し、ペニスの固さが増したのが、嬉し過ぎた。興奮し、乱れる自分の姿が、鏡に映って見え、そのいやらしい姿に、由紀は何度もいった。鏡の前での、バックからのセックス。それは、オナニーで想像していた以上のいやらしさだった。

「弘樹さんだって……興奮してらしたじゃないですか……」

「そりゃ、由紀のあんなエロイトコ見せられちゃな」

先ほどのセックスの、男の勃起は凄まじく、その大きさも、長さも、固さも、カリの立ち方も、それまでで最高のものであった。由紀も、それが分かる程だった。

「またやろうぜ、さっきの」

「い、嫌です……。もうあんな風に乱れるのは……恥ずかしいです……」

そう言いつつ、心の中では、またきっとするだろう、絶対。由紀はそう思っていた。だってあんなに……素敵なセックスだったのだから。

「ホントは好きなくせに」

「……………」

「否定出来ない由紀。何せ、セックスは、好きな相手となら、最高に楽しく、幸せな行為なのだから。セックスが嫌いな女は、恋愛などする資格は無い。

「愛してるぜ、由紀」

「勿論、私もです」

さっき、散々恥ずかしい事を言わされたせいか、愛の告白など、全然平気になっていた。ここぞとばかりに、由紀は男の事が好きだと、何度も言った。

パン！パン！パン！
ベッドを軋ませ、由紀の尻が大きな音を出し、鳴り響く。
もう、何度目かも分からないセックス。愛し合う二人の
性欲は、底無しだった。

「ああん、ちんぽ…、ちんぽ——っ！！」

プレイが始まり、数分。既に、
興奮は最高潮に高まり、
二人とも淫らな世界に突入
していた。男は由紀に散々
いやらしい言葉を言わせ、
由紀もそれを全て、喜んで
叫びまくった。

「おまんこっ！おまんこイイ
ですっ！弘樹さんのちんぽ！
私もぐちょぐちょおまんこに
ズボズボ入ってカリが
擦れてっ！気持ちいい！
あんっ！固い！固い！弘樹
さんのポッキチンポ！
大きくてカたい——っ！！」

パンッ！パンッ！と、まるで
AVのような音を立てて、淫らな
セックスをする二人。これが、
普通の恋人同士の、普通の
愛し合う姿。その事実を知って
いるのは、恋愛を経験している
者達だけだった。金が目当て
だけの女には、こんな素敵な、
甘いセックスは決して経験
出来ない

「どうだ由紀、気持ちいいか」

「ああん、気持ちいい…！気持ちいい
——っ！セックス気持ちいい——っ！
大好き…！大好き弘樹さあん…！！
ああ——っ！！」

セックスの快樂に、男への恋心が
加算され、凄まじい快樂の世界に
酔い痴れる由紀。恋をしないと、
この快樂の世界は、決して味わえ
ないのだ。

「ああんいくら、イクらう——っ！！」

「俺もイクぜ由紀！いく！いく！
愛してるぜ由紀！あああ！！」

パン！パン！パン！パン！パン！パン！

「あああああああ——っ！！」

びゅくんっ！！
びゅく！！びゅく！！

凄まじいピストン運動の
果てに、由紀の膣の奥で
射精する男。男の、由紀
への愛情が、大量の精液
となって、子宮目掛けて
噴出する。愛する女を、
自分の精子で妊娠させる
ために。

「あ、あ！ああ！あ、いく！
いくう……！孕むう……！
あっ……、あっ……
ああ……」

由紀は、男の射精に、腹の底で喜びながら、男を
愛してる、と何度も頭の中で叫びながら、絶頂に
達した。

「は……恥ずかしいです……」

「何言ってんだ、見ろよ俺の……こんなになってる」

「あ……」

今日は、由紀は生理中。セックスは出来ないので、セックス無しのデートとなる筈だったが。

「由紀の私服姿が可愛いから、エロい気分になっちゃったんだぜ」

「そんな……」

とりあえず、自宅に移動した二人。そこで、由紀の姿を見ながら、男はオナニーをする。生理ごときで、男を拒絶するような女ではない。何とかして、男を気持ち良くさせようと頑張る。由紀は、男の恋人である。それぐらい出来て当たり前だった。

「は……裸も見ますか……？あまり自信は無いですけど……。いつも弘樹さんが、興奮してくださるから……。では……どうぞ……」

「ああ……可愛い……！由紀の裸……！ほら、超ポッキしてる……！オツパイ綺麗だよ……！ああポッキしちゃう……！」

25歳にしては、垂れ気味のオツパイ。しかし、乳首の位置が、辛うじて女の魅力を維持する。40歳くらいの、美しい熟女の身体に近かった。

「こんな……のが、いいん……ですか……？」

「由紀を愛してるからね。だからこんなに……ポッキするんだよ……！」

しこしこしこ……

男の勃起したペニスを見て。嬉しさに由紀も興奮する。好きな男の欲情は、恋する女ならば、大歓迎だった。由紀は、普通の恋する25歳のOLなのだから。

「ああ……いくよ、いく！由紀！ああ、イっていいかい？いくよ！」

「は、はい……！イって下さい……！この私のたるんだだらしない身体で……！ああ……！オツパイ見られて……！私……私……っ！ああ……！あっ！！」

びゅるっ！！びゅっ！！

男の精液が、勢いよく飛び出し、由紀の乳房に、たつぷりと掛かる。その温かさに嬉しさと幸せを感じる。

『大好き……』

二人は、愛を確かめ合うかのように、唇を重ね合った。

「はぁん……、ちんぽ……！ちんぽ——っ……！」

廃墟の中。男に犯され、甘い声を出す由紀。相手は、恋人でも何でも無い、知らない男である。にも拘らず、由紀はまるで、好きな相手との、ラブラブセックスのように、甘い声を出して喘ぎ、腰を振りまくっていた。

「会ったばかりの男に、こんなエロいセックスして見せるなんてよ、どんだけ淫乱なんだ、このエロ女が」

由紀の大きな尻を掴み、腰をパン！パン！と打ち付けていく。重量感溢れる、大人の尻が、大きな音を立てて震える。

「もっと、もっとお……！いくらでもエロい事するからあ……！さっきのもっとお……！」

とろんとした瞳で、男の目を愛しそうに見る由紀。それは、何かに憑りつかれたかのようなだった。由紀は、会社の帰りに、見知らぬ男に拉致され、そのままレイプ。そして、薬漬けにされていた。もう、恋人も、仕事の事も考えられない、セックスマシンと化していた。

「シャ○欲しいか？シャ○塗りたくったチンポで、マンコ突かれないのか？なあ由紀」

「う、うん！して！シャ○チンポでマンコドライブさせてえ！ポッキしたチンポでシャ○打ち込んでえマンコに！あんっ！あんっ！」

男は、自分のペニスに、覚○剤の液を塗りたくる。かなりの高額だが、それは回収出来る予定だった。今の様子を撮影し、裏AVとして売り捌くつもりだったからだ。

「ほら……くれて、やるよっ！！」

ぬりゅんっ！！
男のシャ○ペニスが、由紀の膣内に一気に挿入される。

「ひいや…あああああ——っ！！」

ただでさえ敏感な膣内に、大量の覚○剤をぶち込まれ、白目を剥いて、快楽に酔い痴れる由紀。それは、大好きな彼氏とのセックスなどより、圧倒的な幸福と快楽だった。

「ちんぽ！ちんぽ！ポッキチンポ凄いい！シャ○チンポでマンコイクら！！まんこ！まんこ！おまんこ飛ぶう！アッチへ行くう！！まんこ——っ！！」

由紀は、まるで獣のように叫び、淫らに腰を振り、いやらしい言葉を叫び続けた。

「もうらめえ——……！ちんぽ——……！」

ぱん！ぱん！と尻を打たれ、イキまくりながら喘ぎ声を上げる由紀。既に、致死量に近い投薬により、脳内お花畑状態になっていた。どんなに攻めても、もう由紀の頭の中でしか、**快樂の世界は存在しなかった。**

「つまんねー、こいつ」

身体をびくん！びくん！と痙攣させながら、何度も何度もイク由紀。しかし、外見上はそれ程大きな反応は見えない。最早、男を淫らな姿で誘惑し、セックスを楽しむなどという事は、出来なくなっていた。あまりの投薬量に、**廃人寸前なのである。**

「なあにい……そーゆープレイ……？」

首に巻かれるロープを、不思議そうな顔で見る由紀。もう、あらゆるプレイをしたため、何でもOKだった。既に由紀は、大量の覚○剤で、**狂人と化していた。**どんな変態プレイでも、**快樂で受け入れる。**

「ああ、これが最後のプレイだ」

男は、そう言いながらロープを一杯引く。由紀の首に巻かれたそれは、その細く柔らかい首を、きつく締め上げ、**気道を塞いだ。ぐえっ！と、苦しそうな悲鳴を上げる由紀。**

「お前が活着ている間のな……！」

「……っ！！……っ！！」

首を締め上げられながら、下から突き上げられる由紀。緩んだ膣が、**男の極太のペニスを甘く締め付ける。**

「おお、いいぜ……！このユルマンブサイク女が……！」

男は、苦痛に歪む由紀の表情を、嬉しそうに見下ろす。男は、**異常者であり、殺人鬼だった。**女を犯しながら殺すのが、**何よりも楽しいと感じる。**首を絞められ、苦しうにもがく由紀に、**凄まじい欲情を感じていた。**

「っ！！っ！！——っ！！——っ！！」

未だかつて無い刺激に、最高の興奮を感じる由紀。既に、あらゆるプレイを経験しているため、**生半可な刺激では、もう満足出来なくなっていた。**

「ごっ！ごんなの！ばじめでっ！あっ！がっ！ぐっ！げっ！えっ！えっ！えっ！」

首を締め上げられ、窒息しそうなのに、**快樂を感じる由紀。**酸欠により、**思考が鈍化。**性的な快樂が、**脳内を支配していた。**それは、**いままでのどのキメセクよりも、凄まじい快樂の世界だった。**

「気持ちいいだろ？逝く時って、脳汁ドバドバ出るらしいからな。シャ○の比じゃねーだろ。なあエロ由紀！こんなエロい弛んだオッパイのババアのくせによ！！」

たぶん、たぶん、と揺れまくる乳房を手で掴み、滅茶苦茶に揉みしだく。由紀の乳房は、お世辞にも美しいとは言い難い。感触も、ぶよぶよしていて気持ち良くない。しかし、男は興奮していた。何せ、女を犯しながら殺すのが、**最高に興奮し、勃起するのだから。**

「ああ……可愛い！可愛いぜ由紀！このままイクぜ！ほら！お前もイキな！俺に犯されながら！キメセクでチンポセックスしながら首絞められてイキながら逝きな！この行き遅れのブサイク女！ああ！いく！いくいく！あ——っ！！」

びゆるっ！！びゅっ！！
びゅくんびゅくん！！
びゆるっ！！びゆるんっ！！

凄まじい量の精液を、由紀の膣内に発射する男。もう何度目かも分からない射精だというのに、その量は**凄まじかった。**

「ああ……由紀……！愛してるぜ……！」

男は、射精を繰り返しながら、**由紀に唇を重ねた。**

びゅくん…………びゅくん…………

未だ治まらない、射精。くちやくちやと、由紀とディープキスを繰り返す、乳房を揉みまくっている男。やがて、口を離し、その身体を起こす。

「由紀……気持ち良かったぜ……」

目の前に居る、微妙なルックスの、黒髪の女。眼鏡を掛け、涙と涎を垂らし、快楽に支配されたまま、その表情を凍らせている。突き出された舌。かっと思開かれた瞳は、瞬きも止まり、虚空を見詰めたまま、視線は動かなかった。

「ほら……由紀の中で、俺のチンポ、まだボッキしてる」

全身を汗だくにし、両手を広げ、胸も下も隠さずに、男を受け入れたまま、動かない。由紀は、もう死んでいた。男の締め上げるロープで、気道を塞がれたままの、乱暴なセックス。酸欠による、窒息死だった。

「お前が可愛過ぎるから……！」

男は、由紀の中で、未だに勃起が収まらないペニスを、再び動かし出す。射精したばかりだというのに、賢者モードにならなかった。何故なら、男の殺人による快楽は、性的な快楽とは別ものだからだ。単純に、男が異常者だから、というのもあるが。

「ああ……この弛んだ40歳のババアみてーなオツパイが最高にイイ……！！」

男は、殺人鬼だった。相手が男だろうが、老婆だろうが、殺す時は最高に勃起する。死体が相手でも、それは例外では無かった。男は、殺人鬼であると同時に、ネクロフィリアでもあるのだ。

「いくらでチンポくれてやるよ……！お前みてーなブスは、レイプでもなきやセックスする機会も無いだろ？死体を犯してやるからよ、その醜い身体、もっと見せな！おらっ！」

男は、物言わぬ死体となった由紀を、容赦無く犯し始めた。



「ほらっ！ほらっ！セックスだぜ！嬉しいだろ
ユキ！こんなにお前にボッキしてるぜ！」

ぬりゅっ！ぬりゅっ！と、勃起しまくったペニスを、
由紀の膣内から出入りさせる男。もう死体となった
由紀は、膣は濡れなかったが、何度も射精されて
いるせいで、膣内はぐちゃぐちゃだった。大量の
精液が、男のペニスを滑らかに出入りさせる。

「何て可愛いんだ……ユキ……！もう好きに
なっちまうぜ……！」

死体愛好家の男は、由紀の微妙なルックスにも、
25にしては弛んだ、だらしない体型にも欲情
する。いくらでも勃起するし、何度射精しても
萎えなかった。由紀が、死体だからだった。

「ユキ……！ああ……！オッパイ可愛い……！
熟女モノのAVみてーだぜ……！」

がくん、がくん、と身体を揺さ振られ、横に
広がった由紀の乳房が、円を描いて揺れる。
美しいとは言えない、由紀の乳房。それでも、
男を勃起させる事は出来た。本当に醜い
乳房は、見るに堪えないものだ。
この程度では、男は萎えない。

「またイっちゃう……！」

形は崩れているが、白い肌と、
ピンク色の乳輪が、男を誘惑し、
絶頂へと向かわせる。

「ああいくっ！ユキのエロオッパイ
見ながらイク！垂れたオッパイエロくて
可愛い！ユキ！ユキ！ああ！いく！
ほらっ！オッパイ見ながらイクぜユキ！
25のくせに垂れまくったオッパイ！
可愛い！！ああ！！いく！！いく！！
ああ——っ！！」

びゅくん！！

男は、由紀の揺れまくる乳房を、食い入る
様に見ながら、膣内に思い切り射精した。



「ほら……みんな見てるぜ……！ユキの裸……っ！どうだ？どんな気持ちだ？」

ぎし……ぎし……

ロープで宙吊りになり、その裸体を晒す由紀。一糸纏わぬ全裸。乳房も、綺麗に切り揃えられた陰毛も、全て隠さずに晒している。羞恥に身体を隠す事も無い。既に、由紀は死んでいた。羞恥心など、ある訳が無い。

「きっと……世界中の男が、今ユキの裸見て、シコシコオナってるぜ……！なあユキ、嬉しいだろ、お前、これから世界中のアイドルだぜ……！」

男は、カメラに背を向けながら、ペニスをしごきまくる。今の様子を、世界中にネット配信していた。

「ほら……！ジャパニーズカントリーガールビューティホーってコメントあるぜ……！お前みたいなブスのババアでも、海外じゃ可愛い女の子って言われるんだぜ……！きっと今の俺みたいに、チンポしごいてビュってザーメン発射してるぜ！」

由紀の垂れ気味の乳房を見ながら、勃起する男。白い肌に、縦に伸びて歪んだ乳輪が、やけに女らしくエロい。基本、乳輪が正円である事など滅多に無い。巨乳で、乳首が小さく正円なのは、エロ漫画の世界だけである。

「こんだけデカいとすぐ垂れるよな……！どっかのバカとは違って、カレシとセックスしまくりみただけどな、こんなブスのくせに…！ああ……！オッパイエロい……！乳輪デカくてエロいっ……！」

しこしこしこ……！

男の勃起が、最高潮に達する。由紀の淫らな裸体が、男を含め、世界中の目に晒される。その事実が、男を更に興奮させた。

「いくっ！ほら！いくぜユキ！死体のオッパイにザーメンビュってイクぜ！ほらっ！ああ！！」

びゅるっ！！びゅっ！！びゅくん！！びゅっ！

白い、生気を失った裸体に、黄色い精液が降り掛かり、その身体をどろどろに汚していく。その様子は、実に官能的だった。

その後も、由紀の死体は世界中の目に晒されながら、異常者の男によって、徹底的に犯されまくった。



















Reminder that translations are not only welcome,
they are in demand!

提醒一下，不仅欢迎翻译，
他们很抢手！

翻訳を歓迎するだけでなく、
彼らは需要があります！

번역도 환영합니다
그들은 수요가 있습니다!